

2023年5月19日

ASIA GATE VIETNAM CO., LTD.

豊田英司

ベトナムで人事労務のアドバイス、進出時の行政手続き代行、そして現地でのビジネスのサポートをしております、アジアゲートベトナムの豊田と申します。

今回より、ベトナムにおける「消費者行動の変化」「ビジネスチャンス」「弊社へのお問い合わせが多い事項」などについて、寄稿させていただければと思います。

=====

【ベトナムの現在と日本の過去の比較から消費動向を読む】

今回は、ベトナムの現在の経済状態を日本人がイメージしやすいように、過去の日本と比較したいと思います。

「ある国で、どんなものが売れる機会が相対的に高いといえるか」をイメージする時、「人口」「年齢」というのは非常に大事な要素となります。

まず、人口でいうと2023年4月でベトナムの人口は**1億人**に迫る勢いです。

ベトナムの人口数は世界ランキングで言うと16位に相当し、日本の1967年頃の人口数と同じくらいです。

ですので、国としての消費ボリュームはかなりのインパクトがございます。

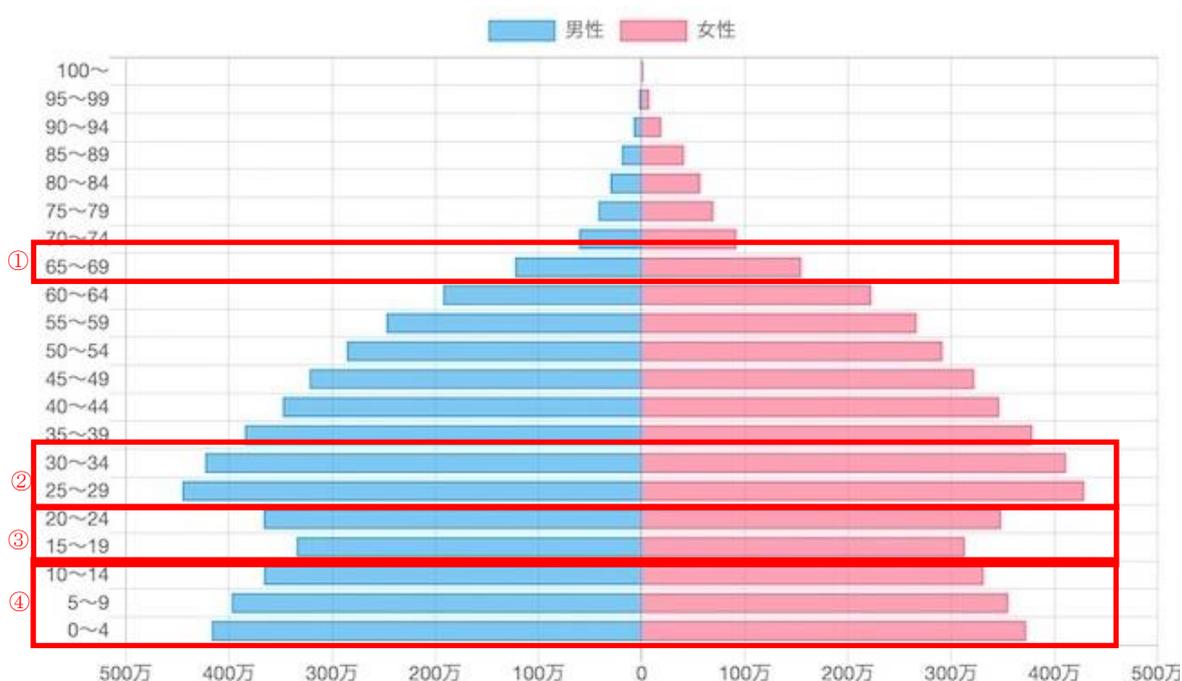
【参考】【2023年度 世界人口ランキング】（2023年4月時点）

国連人口基金（UNFPA）「世界人口白書2023」より

順位	国名	人口	順位	国名	人口
1位	インド	14億2,860万人	11位	エチオピア	1億2,650万人
2位	中国	14億2,570万人	12位	日本	1億2,330万人
3位	アメリカ	3億4,000万人	13位	フィリピン	1億1,730万人
4位	インドネシア	2億7,750万人	14位	エジプト	1億1,270万人
5位	パキスタン	2億4,050万人	15位	コンゴ共和国	1億230万人
6位	ナイジェリア	2億2,380万人	16位	ベトナム	9,890万人
7位	ブラジル	2億1,640万人	17位	イラン	8,920万人
8位	バングラデシュ	1億7,300万人	18位	トルコ	8,580万人
9位	ロシア	1億4,440万人	19位	ドイツ	8,330万人
10位	メキシコ	1億2,850万人	20位	タイ	7,180万人

そして、人口ピラミッドを見ますとまず以下のことに誰でも気づくと思います。

(参考) 【ベトナムの年齢別・男女別の人口ピラミッド】 (2019年時点)



(参照 : Graph To Chart Web site より²⁾)

- ① 65歳～69歳(現在69歳～73歳)以上の人口はかなり少ない
- ② 25歳～34歳(現在29歳～38歳)あたりの人口が非常に多い。
- ③ 15歳～24歳(現在19歳～28歳)の人口が急減している。
- ④ 10歳～14歳(現在14歳～18歳)以降、人口増が回復している。

これに影響を与えた社会現象としては、以下の3つがあるように思います。

- (1) 「1946年～1954年の第一次インドシナ戦争」
- (2) 「1988年以降の二人っ子政策」
- (3) 「2000年以降の急激な経済成長」

(1) については第二次世界大戦前、ベトナムはフランスの植民地でした。第二次世界大戦中、一時、日本が占領した時期もありましたが、敗戦によって日本が撤退し、空白期間ができたことでベトナムは自国政権を樹立しました。

しかし、すぐにフランスが再植民地化を狙ってベトナムとの戦争を開始しました。

(第一次インドシナ戦争)

したがって、この戦争が終結する 1954 年までは、なかなか人口増加が難しい状況だったのが①の人口層と思われます。

その後、アメリカとの第二次インドシナ戦争（日本でいうベトナム戦争）を経て、ベトナムは共産圏側の国家となるのですが、同盟国である旧ソ連の衰退に伴い支援が枯渇していきます。

ここで人口抑制策として導入されたのが（2）「二人っ子政策」（1988 年～2017 年）です。これが最も厳格に実施されていた時期が③の人口減少に影響を及ぼしていると思われます。

そして、（3）については 2006 年以降、中国の人件費の高騰などでベトナムは「次なる生産基地」として先進国から注目を浴び、外国企業の進出による経済成長が本格的に始まります。経済成長のおかげで食料配給制も廃止され、「二人っ子政策」も形式的なものとなり、②の人口ボリュームゾーンが就職、結婚、出産をするようになり、④以降の若い人口の回復につながっていると思います。

ここからの考察として以下のようなことが考えられます。

- ・現時点では高齢者人口はそこまで多くないが、今後は続々と増えていく。
- ・②25 歳～34 歳（現在 29 歳～38 歳）の「働き盛り」世代があと 20 年は社会の消費を引っ張る。
- ・上記世代の子供にあたる「豊かな生活しか知らない」デジタルネイティブ世代が「趣味・遊び」の「オタク的」な消費の大きな集団となっていく。

これらを踏まえて、私は、今のベトナムの状況を日本の過去と比べた時、1975 年～1985 年の「オイルショック以降、バブル経済が来るまでの日本」に近い状況のように感じています。

つまり、あの頃、日本で流行った「モーレツからビューティフルへ」(*)のように、ここまで、激動の歴史を経て歩んできたベトナム社会が経済的な成長軌道に乗り、今後、「生活の豊かさ」を目指し、現在 29 歳～38 歳の「子供 2 人を持つ夫婦」と、その子供である小中学生と共に消費活動を活発にしていく、というようなイメージです。

(*)1970 年に富士ゼロックス（当時）が提供したテレビ CM で有名になったセリフ。行動経済成長時の「仕事一辺倒」の生き方へ一石を投じる内容が話題になった。

例えば、「郊外に買った中価格帯の一軒家に家族で住み、週末にはみんなでファミリータイプの車でドライブをし、ランチは大人も子供も楽しめるメニューラインと価格帯のファミレスで食べ、そして、アニメ映画やスポーツ観戦（もしくはスポーツ自体を楽しむ）を楽しむ、というような、まさに日本が1970年後半以降から実現した生活感に突入していくように思います。

ですので、ベトナムでの今後のビジネスを考えた時、この頃の日本で流行したものをよく調べてみるのは効果的ではないかと思えます。

今回は以上となります。

豊田英司

<https://www.asiagate-vietnam.com/>

参考資料 リンク先

1 <https://tokyo.unfpa.org/ja/SWOP2023>

2 <https://graphtochart.com/population/viet-nam-transition.php>